I'm Aliece!?　It's a wonder land

中野柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉ'ｍ Ａｌｉｅｃｅ!? Ｉｔ' ｓ ａ ｗｏｎｄｅｒ ｌａｎｄ

【Ｎコード】
Ｎ２９８５Ｖ

【作者名】
中野柚

【あらすじ】
トリップ少女がいきなり不思議の国に連れてこられて、”アリス”になって…!?

01. Die Geschichte f?ngt pl?tzlich an

昔々、あるところに不思議の国がありました。
不思議の国には不思議な住人たちがすんでいます。
そこでは皆、誰もがアリスを好きになります。
ですが、アリスを求めるその世界にアリスはいませんでした。
アリス…アリス…アリス…アリス……

不思議の国は夢の国。それゆえに、今まできたアリスたちは
夢から目を覚ましてしまうと二度と、戻ってはこなかったのです。

そこで不思議の国は考えました。
”そうだ！もう二度と目を覚ますことのできない”女の子”（アリス）を
連れてくればいいのだ！！”と…。
・
・　・　・
・

と、まぁそんなわけで連れてこられた”アリス”というのが私。
名前は———。まぁ、今はアリスなのだから、この名前はもう意味がないのだけれど…
ちなみに私はもう目を覚ませない。なぜって、さっき自転車で突進して家に帰ろうとして車とぶつかっちゃって死んじゃったから。
意識不明ならまだ戻れる可能性もあるのだろうけど…
どうなんだろう…？あの後、目の前が眩しくなってなんか芋虫から自分のことと、この世界のことを聞いただけだからなぁ…
もしかしたら芋虫が嘘を言ったかもしれないし…ってかこんなの夢

だろうし…
まぁ、今は楽しめばいいよね！！

ちなみに私が芋虫から聞いた話によると、
不思議の国には意思があって、
私はさっき死んでしまって、それを見つけた不思議の国が哀れに思って・・というか丁度いいカモだと思って自分の中に連れてきた。
そして、不思議の国の住人はみんな変わっていて、動物の名前でも人間の姿をしているので普通に話せるから問題ないらしい。

まぁ、簡単にいえば、ルイス・キャロルの描いた物語『不思議の国のアリス』の世界は存在して、私はその中に入ってしまって”アリス”になった…というわけなのだ。

そして私はこの世界しか居場所がない…いや、拒否すれば即、極楽浄土に行けるのだけれども…それは嫌すぎる！！だってまだ私、１５歳だもん！！まだ青春真っ盛りだよ！？なのにそんな簡単に成仏するわきゃねーだろ！！…なので私は芋虫の言うことを聞いてこんな世界に来ちゃったわけなのです。

まぁ、来たばかりで居場所がないから今はトボトボ歩いてるんだけど…ね…

「おい…お前…」
えーと、私「不思議の国のアリス」は好きだったから結構内容や登場人物は覚えてるんだよね！！
「おい！！聞いているのか！？」
白兎にイカレ帽子屋、チェシャ猫でしょ？公爵夫人！！それに三月兎に眠りネズミ…あとは女王さまに、さっきの芋虫と…他には…
「おい！！！」

もう！！さっきからうるさいなぁ…集中できないじゃない！！文句言ってやる！！！

「なによ！！さっきからうるさいわね！！人が集中してるのにうるさいでしょ！？マナーってのを守りなさい！外だからって叫んでいいことにはなんないのよ！！！」

って…誰？この人・・っつかナイフ持ってるし！！うっひゃぁ～！！ヤバイ！！変な人に注意しちゃったよ！？

「おい…あんま舐めてっと俺もキレるぞ…！？」

ってかもうこっちにナイフ突き出して突進してきてるし…キレてんじゃん！！沸点低っ！！

もう最悪！！やばいよ！！二度目の死を体験しちゃうよ！？ヤバイ！！誰か助けてっ！！！

私が目を閉じかけたそのとき…

「げふっ…！！」

「ねぇねぇ、君が２３番目のアリス？？」

私の上から声が聞こえた…上…？

「えっ！？」

上を見ると、そこにはニヤニヤ顔の猫耳男が…

「ふんふん…芋虫の臭いがする…ってことはやっぱり君、アリスだね！」

な…なに勝手に人の臭いかいでんのよ！！ってか、えっ！？私、今芋虫の臭いするの！？やだ…サイアク…」

落ち込んでしゃがんでいると、猫耳男が降りてきた。ってコイツも銃持ってるし！！

なに！？この世界では武器持つのが普通なの！？もう（ｒｙ

「ねぇねぇ、せっかく助けてあげたのにお礼のひとつも言えないの？君、バカなの？ねぇ、バカ？」

ぷっちん！！

「ありがとっ！！！でも命の恩人だからって、バカ、バカ連発してんじゃないわよ！！」

そういうと私は猛ダッシュで走った。もうそれはもうめちゃくちゃ全速力で走った。

01. Die Geschichte f?ngt pl?tzlich an

このお話はファンタジーラブコメディにしたいと思っています＜＞
昔から”不思議の国のアリス”が好きで本や映画、それにゲーム、
アリスに関係するものなら全部確認して、ほしいものは買っていました＜＞

デ○○ニーランドとかでも行ったときはアリスのとこに必ず行くように
していて・・いつかはアリスのお話を自分で書きたいと思っていました
！！なのでこの小説サイトを見つけたときはいつかは書こうとおもっ
ていたのですが、最近、連続でアリス関係を見つけていて…これはいま、
もう書いてしまえということか！？と思って書いてしまいました。

頑張って書いたので楽しんで読んで欲しいです＞（＿＿）＜

02. Le cri de la fille r?p?te ? travers

チェシャ猫に会って…次は誰に会うんだろう…？

02. Le cri de la fille r?p?te ? travo

はぁ…はぁっ…はぁ…

全力で走ったから疲れた…ちょっと一休み…

「ねぇ、君、足遅いね。ふぁ～あっ…。ボク歩いてても簡単についていけたよ」

……。

「ねぇねぇ？聞いてる？ねぇ～」

「聞いてるわよ！！だけどアンタ！人のこと貶してそんなに楽しい！？」

「ん～、わりかし？？」

くっ…ダメだ！！まともに受け答えすればするほど自分が負け犬に思えてくる。

「ねぇ、アリス～」

「なによ…」

「お腹すいた？」

「知るかっ！！ってかアンタ誰よ？私のあと付いてこないでくれる？」

「ボク？ボクはねチェシャ猫だよ～」

やっぱり…ニヤニヤ顔で猫耳っていったらまぁ一人しか浮かばないもんね…

「そう、じゃあチェシャ猫！私についてこないで！！」

「え～？ダメだよ？チェシャ猫はアリスの前に現れては助言をする役目だもん♪」

「あなたの言葉は助言じゃない！！暴言よ！！」
そう言って私は今度こそ一人で走り出した。

「ん～、２３番目のアリスはお転婆だなぁ～。今までの子たちはみんなボクを見ただけで、かわいこぶりっ子してくるから楽だったのになぁ～まぁいっか、どうせすぐボクのモノになるし～、それまでどこに泊まろうかな…？
そう言ってチェシャ猫は一人歩きだした。

そして私のターン！！ドロー！！…なんて某アニメのマネしてる場合じゃなくて…
森の中を歩いていると変な声が聞こえた。

「ふむ…６時３分か…。今日も時間通りティーパーティをはじめよう！！」
いや！！まて！！なんて曖昧な時間なんだ！？
「わーい～☆それじゃあ今日のお茶はなにかな？アプリコット？あ、それ以外は飲まないからヨロシク☆」
選択肢、ひとつしかないじゃない！！
「お？お客さんかな？あそこに女の子がいるぞ。三月兎、連れてこい。」
げっ！！見つかった！！
「え～ボクのうちのお庭貸してあげてんだから、お前が行ってこいよ～」
「む？私はアプリコットを持ってきて更にポット、カップまで一級品のものを持ってきてやったのだぞ？」
「ちぇっ・・分かったよ…」
く…来るなぁーーー！！！
心の中で祈るもそんなの叶うわけもなく…
「はぁ…君、逃げたら犯すよ？」

選択肢を選ばせろーーー！！！
と、結局私は逃げることもできずティーパーティに招待されました
とさ…ｏｒｚ

03. Il mondo ? assurdo sempre（前書き）

三月兎にイカレ帽子屋の狂ったティーパーティにアリスは…

03. Il mondo ? assurdo sempre

「お嬢さん、どうしたのかね？おいしいお茶においしいオヤツもある。なのに何故そんなにも不機嫌なのだ？」
「そうね…無理やり拉致られて、変なティーパーティに招待されて、逃げることはできないうえに隣を見れば砂糖たっぷりで溶けきってないお茶…こんな状態でニコニコできる奴がいるならソイツは聖人君子よ！？」
「え～？砂糖はいっぱいの方がおいしいじゃん♪猫ちんもそのほうがいいって言ってたもん☆」
うえっ…キモイ…もうこんなの紅茶とは言えないと思うのは私だけだろうか…
「ふむ…確かに三月うさぎのは吐き気がするほど気持ち悪いが慣れればなんてことはない。」
そう言って帽子屋は紅茶を一口飲んだ。

「もぅ～イカレ野郎の分際でボクの崇高なるお茶を気持ち悪いとか言わないでよね～。君のドぎつい服のセンスよりは気持ち悪くないしｗｗ」
た…確かに…。帽子屋の服は白地にトランプのマークを振りまいたような感じで、しかも全て金色の糸で縫ってある…顔はいいのにセンスが悪い…いわゆる残念なイケメンだ…。
「貴様…私のセンスを侮辱したな…！！！」
そういって帽子屋は持っていたステッキを振り上げた。すると太陽の光を受け、輝いたと思ったら、それはいきなり剣になっていた。
「悪い？本当のことをいったまでじゃないかｗｗねぇ？アリス？？」
いきなり話をふられ、私は、
「えっ！？ま…まぁそうね…」
本当のことだし…と、思わず頷いてしまった。

「お前！！…？…アリスだと？・・・」
「え？えぇ…」
帽子屋は驚いて剣もといステッキを落とした。
そして私に近寄ってくると、いきなり手の甲にキスをしてきた。
…え？な…なぜに！？いきなり！？出会ってまだ間もないのに…！
？！？！？！？！？！？

私は考えすぎて頭がパンクした
瞬間、目の前が真っ暗になった…

04. Eine Zeit im Traum（前書き）

ーーー、ーーー

私を呼ぶ声はどこか懐かしく、どこか優しく、どこか寂しい…

あぁ…ここはどこ…？

04. Eine Zeit im Traum

・
・　・
・

「もう…ーーーったら、起きて。ーーー？」
「ん…？あ、姉さん！お帰りなさい。帰ってたの？」
「さっき…ね、もう…女の子なのにお腹だして寝ていたらダメじゃない。」
「…あ。いや、でもね！？木陰ってなんだか落ち着いちゃって…えへへ…」
「まったく…ふふっ、いいわ。夏とはいえ冷えたでしょ？お茶にしましょうか。」
「うん！！姉さん大好き！」
「もうっ、調子がいいんだから。」

こうやって姉さんと過ごすのが好きだった。とても落ち着いていて穏やかな時間。
この時間は私の宝物だった。

「あ、お菓子はなにがいい？」
「姉さんが作ってくれるならなんでもいいよ～？」
「ならマフィンはどうかしら？？」
「大好き！！」
「ちょっと待っていて…」

姉さんが頑張っている間、私はテラスで外を見ていた。
小さなテーブルの上には『不思議の国のアリス』があって私は思わずページを開いて眺めていた。

「ーーー？」
「え？あ、なに？姉さん。」
「出来たわよ、マフィン♪」
あれ？思わず時間を見ると結構経っていて、それだけ私はこの本を見ていたのかと思うと、姉さんの手前、少し恥ずかしかった。
「ねぇ？姉さん、姉さんは、ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー。」
あ…れ？何を言ってるの？私。聞き取れないよ…。あぁ、もううるさいな
なんでほかの人の声が聞こえるの…なんで、なんで…？

・
・
・

「…スッ、……リス！、アリス！！おい、起きろアリス！！」
違う…違うよ？私の名前はーーー、アリスじゃ…ないよ…ねぇ、姉さん。
だってーーーはあなたが付けてくれた名前で…だから………

・
・

「…ん。あぇぅっ？ここはぁ……ドコ？？」
「あ、やっと目覚めた。まったく…大丈夫だった？君ってばかわいそうｗｗイカレ野郎に手を汚されちゃって気絶したんだよ？」
…あぁ、そういえばそうだった。
「貴様だけはいつか潰す…まぁ、今は万年発情期ウサギよりお前だ…。すまなかった。男への免疫がこんなにまでないとは思わなくてな…」

なんか今微妙に馬鹿にされたような…
「いや、ないほうがまぁ、こっちにとっても都合はいいし…な…」
「うん、調教のしがいがあるよね☆」
なんてことはないように言う二人に寒気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2985v/

I'm Aliece!?　It's a wonder land

2011年10月9日10時18分発行